

教宣 せぶん

タイタニック号の話し

絶対沈まないと言われていた豪華客船タイタニック号。氷河にぶつかり、そのタイタニック号は冷たい海に沈んでしまったわけですが、映画化もされ、この話しは大変有名になりました。映画の中ではあまり取り上げられませんでした。実話ではタイタニック号が氷河にぶつかったという一報を聞いても「沈むわけがない」と船内で酒盛りを続けていた乗客がたくさんいたそうです。その人たちのほとんどは、タイタニック号と運命を共にしてしまいましたが、一方、「沈むかもしれない」「大変なことになってしまった」と考えた人たちは「次の一手」を考え、沈没に備え、救命ボートを用意し、すべての人ではありませんが一命をとりとめることができたそうです。結局、危機感のなさ、状況判断の甘さが、生死を分ける境界線になってしまったわけです。

私たちの社員制度をタイタニック号になぞって考える人たちがいます。「10月7日」が氷河にぶつかった瞬間、「代理店転進」が救命ボートとたとえ、引き続き社員制度の道をめざしてたたかっている私たちを、酒盛りしている乗客だと考えているようです。立場、立場で物事の見方も当然異なってくるので仕方がないことですが、私はこのタイタニック号の話しで私たちの社員制度をたとえるなら、社員制度が氷河にぶつかった瞬間は「10月7日」ではなく、その1年前の「10月1日」だったと思います。「企業合併する前に、自社にはないこの契約係社員制度を何とか日勤社の中で『処分』してきて欲しい」というのが東海経営の本音だったことは「関係者」の話しでも明らかです。何よりも合併後の経営のありとあらゆる「施策」「対応」をみれば一目瞭然です。そして日勤社の労使関係でそれが叶わないとみるや「第2のシナリオ」を敢行し、その結果、現在の状況が生まれているというのが「真相」だと思います。そう考えると、救命ボートは募集網として残っていく「代理店転進」ではなく、社員制度をなくすという経営の「第2のシナリオ」に備え、「たたかう」という選択肢・切り札を持つことができる「全損保に残ること」こそが「救命ボート」だったと思います。誰が酒盛りしていたのかは言及しませんが、私たちがこのような最悪のシナリオも予想して全損保に残る判断を下していたとしたら、私たちが「酒盛り」などできようがありません。

タイタニック号の話しがそうであるように、「真実」「事実」は歴史が証明します。私たちがいまをたたかって明日を拓くことによって、必ずやいま見えない「真実」「事実」が見えてくるはずです。